

日本武道の特質に関する考察

—文化としての成立を通して—

大 坪 壽*

A Study of a Specific Feature of Japanese 'Budo'

—Through the Formation as Culture—

Hisashi OTSUBO*

Abstract

It is argued by some authors that, when we consider it as a cultural phenomenon, Japanese Budo (the Way (moral principle to follow) of behaving for Samurai) seems to have an aspect which is the core of the feature of Japanese culture. A cultural phenomenon ought to have a Steadfast faith as its core even though it has undergone various changes through ages. Japanese culture itself, whatever changes it has undergone, could not have developed its specific feature without a Steadfast faith as its core.

Thus the specific feature of Budo as a cultural phenomenon is thought to lie in the fact that its core or Steadfast faith was shaped by old 'Shinto' (the Way of living according to the Nature) and has been handed down from generation to generation, being influenced in its long history by such ideas as Buddhism, Confucianism and Taoism, and blended with various elements.

We shall study in this paper that specific feature of Japanese Budo through the formation as culture.

KEY WORDS: 神道, 農耕文化, 型

はじめに

筆者は、これまで次の2つの視点に立ち、日本武道の「心」を精神文化という観点から考察を試みてきた。まず、文化現象はどのように時代の変遷を経過しても、どこか一点変化しない所、すなわち「核」を持っていない限り特質を持った文化の変遷・発展はあり得ない。さらに、その「核」

となるものは、諸文化現象を決定し民族文化の本質をなし、永久にその影響を民族に伝えるものであると考える。

精神文化としての日本武道の「心」は、日本古来の農耕文化に基礎した「神道」(自然の道)がその核を形成し、儒教・仏教・道教等と習合しながら、さらにまた長い歴史的経過の中で、さまざまな要素が絡み合いながら育成・持続されてきたも

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

のであり、しかも、その「核」となる日本古来の農耕文化に基礎した「神道」(自然の道)は、諸文化現象を決定し、民族文化の本質をなし、永久にその影響を民族に伝えるものと考えられるのである。

本稿では日本武道が文化として成立する中に見られる、前述した日本武道の特質について文献を基に考察するものである。

研究方法

筆者が主張するところの「神道」とは、日本民族の中に主観的形式的な文化的感覚として育成・持続してきた民族的・文化的感性のことである。

本稿では、前述した2つの観点に立って、農耕文化に基礎した神道(自然の道)に見られる特質を、日本武道の文化としての成立の中に求め、その特質と、日本武道の技術体系、教習体系や伝授方法などの中の特徴との関連性から考察するものである。

結果と考察

1. 農耕文化に基礎した神道(自然の道)

人類の文化が、民族を単位とした民族文化として成立し、他民族文化との摺合を経験しながらも、独自の民族文化として発展してきていることは、明らかな文化的事実である。

この文化には2つの大きな流れがある。その1つは文化史上牧畜文化と呼ばれ、欧米文化の源流となり、人間の物質的側面(身体)や目に見える外界の世界(もの)を重視する傾向を特色としている。そこにおける探求の方法は、外界の現象を主観を排除して冷静に客観的に観察し、その「もの」の性質や、そのものともとの間の因果関係などを究明する科学及び科学的思考として各専門分野に分科しながら結実してきた。他方には、文化史上農耕文化と呼ばれ、東洋文化の源流となり、自分という意識の主は何であるかということに最大の不思議を感じ、人間の精神的側面(心)や目に見えない価値の世界(神・仏)を重視する傾向を特色としている。そこにおける真実探求の方法は、自分の内なる内界の現象を、眼を閉じて、自然に、直観的に達観し、人生とは何かを信解する学乃至道と総称される学問及び達観的思考法とし

て結実してきた。

学問とは、「真実」の探求であり、真実とは「実証」に耐えることである。その真実には客観的真実と主観的真実の2通りがあり、実証にも、客観的実証と主観的実証の2通りがある。牧畜民族が探求し続けてきた真実は、客観的真実であり、客観的実証によって判定されてきた。これに対し、農耕民族が探求し続けてきた真実は、主観的真実であり、修行を通して得た主観的実証によって判定されてきたのである。

日本において、明治時代には、この学問と西洋から伝来の科学と区別するために、「教学」と呼んでいた。これは、日本古来の神道思想を中心に心の実を探求する学問のことを指すが、奥田克己は、「神道ではその究極の姿を「真心」と呼び、儒教では「至誠」、仏教では「仏心」と呼⁶⁾んでいる。「真心」の探究は、各人が己の心を主観的に内省することによって知り得るものである。突き詰めれば万人に共通な普遍的なもので、言葉を変えれば、同じ風土的環境の中で共同の団体生活を送り、長い年月の間同様に感じ同様に考え、同様の理想を抱いて労作し生活している内、自ずから形成された共通の心である。すなわち人間の本心で、邪心を捨てて清浄な心(自然な心)になれば、誰でも同じ心を学び取れるものである。すなわち心の学問、人間形成のための学問である。そしてそれは言説を用いず、心と心の触れ合いによって伝承され、最善の方法は立派な先生に師事して、師の生きた言動を通して師の心に触れることである。その際、自分の心が曇っていたり、汚れていると学べないので、神道では最も重要な行為の1つである「禊ぎ、祓い」によって心を清めた。神社に参拝する際に、御手洗いの真清水で口をすすぎ、手を洗うが、これは身体を清めることによって、心を清めるための手段である。また、襟を正すと言う表現にもあるように、目に見える行為を先にすることによって、目に見えない真心を誘い出す、真心を伝える。これを奥田は、「神道では「行伝」といい、これこそが神道の極意⁷⁾と述べている。

また、わが国はアジア大陸の東端近くにある小

さな島国であり、沿岸を暖流と寒流が交流している。したがって、大陸的要素と海洋的要素が交錯した複雑で多様な穏やかな気候風土の中で、農業を基本生業としてきた。その中で、鋭敏繊細な自然感情や形の小さいものの中に細やかさを感じ、深さを見出し、纏まりを求める心的特徴をつくりあげてきた。

以上述べた特質を、武道の文化としての成立の中に求めてみたい。

2. 日本武道の文化としての成立

現在広く行われている日本の伝統文化である武道は、本来相手を倒し、自己の安全をはかる闘争の技術であった。しかも、戦場における戦闘技術として、鎧兜の重装備で馬に乗り、弓を射て、薙刀や槍を振るい、剣で切り結び、組み合ってねじ伏せるといった総合武術であった。しかし、馬の機動力に依存していた重装備や、長大な太刀は、鉄砲の伝来により、軽装備や短い刀身に変わって行った。ここに長大な太刀を振り回し自分の腕力に頼って戦った武術から軽装備の介者剣術へ、さらに無装備の素肌剣術へ発展し技術化していく素地が生れた訳である。人の殺傷を目的とする戦いの技術である実用性を持った運動が、実用性を離れ、社会的な人間にとって、価値ある行動様式になり、文化として成立したと言われている。すなわち技法の習熟が人間の自覚、人間的向上につながるという文化的性格を持つに至ったのである。

主な武道の文化として成立した時期を見てみたい。

弓特に騎射は流鏑馬、笠懸、小笠懸、犬追物や牛追物等に見られるように神事および競技としても発達した。騎射は14世紀初期に、馬術は14世紀末期から15世紀初期にかけて文化として成立し、他はおおむね室町末期から近世初期にかけて成立したと言われている。弓・馬術が他より早く文化として成立したのは、先んじて発達し盛行したことのほかに、今村嘉雄は、「弓・馬術ともに人体を攻撃目標とせず、十分にその機能の優劣をきることができた²⁾」点を上げている。

武道が文化として成立するには、総合武術が分

化し、天才的な人物の出現が必要であった。例を上げると、剣の飯篠山城守家直、愛洲移香、中条兵庫頭長秀、上泉伊勢守信綱、塚原卜伝、柳生宗厳、宮本武蔵、小野次郎右衛門忠明、槍の大内無辺、佐分利猪之助、宝蔵院胤栄、高田又兵衛吉次、弓の小笠原信濃守貞宗、日置弾正正次、吉田六左衛門重勝、馬の大坪式部大輔慶秀、村上加賀守永幸、斎藤安芸守好玄などは自身が名手であったばかりでなく優れた後継者を輩出した。技法の優秀さは勝利によってのみ証明され、流派の成立にも、その維持発展の上からも天才の流祖と、名人・達人の後継者が必要であった。天才により高度な技術が考案され、それを習得するためには、専門的な指導と、相当期間継続的な修行が必要となり、技術体系、教習体系や伝授方法が整備された。その中の特徴的なものを上げてみる。

技術の精髓を集約し、段階的に体系化されたものが「型」として確立した。これは、無駄な枝葉を切り捨て省略して、最も適切で効果のあるようにするために、必要なエキスを無駄なく圧縮されたものである。中林信二は「型」は、「機能的にも、形態的にもぎりに単純化され洗練されたもの⁴⁾」としている。しかも「型」という文字が意味するような法則性や軌範性が存在している。西山松之助は、「型」について「そこに一定の法則、演技法というものがあるということは、それに拘束されるということである。拘束されるということは消極的なようであるが、この場合、拘束されてその演技法則やルールに随順して訓練を受けたほうが、たしかで、立派で、速やかに上達する⁵⁾」と述べている。

さらに、「型」を厳密な作法にのっとり、私心を捨て、素直に、正しく繰り返すことにより、先人のその芸に対する技術を通して、言葉や文章によって表現することがほとんど不可能に近い「勘」や「コツ」などの主観的な要素を師から弟子に、心の触れ合いによって以心伝心的に伝授され、信念や精神を学習していくことになり、事と理、形と心、身と心の一体を体得する。すなわち、形を学ぶことが心を学ぶことになる。「習（ならい）」に従い、技が習熟すれば無駄な力や動きがなくな

りすっきりとした運動になって現われるという運動の簡潔性があり、究極は無心、無我、無念無想の境地に至ると言われている。

それぞれの特徴の中に、特質を求めてみたい。

前述した中に見られる技の集約や、運動の簡潔性については、江戸時代中期の思想家富永仲基⁶⁾が、日本文化の特徴を「絞」の一語で表わし、また日本民族の深層に潜む無意識の心理—民族性や民族精神について類型学的考察を加えた高山岩男³⁾も単純簡潔性を特徴として上げている。複雑なものを「ひとつかみ」にした単純化を、俳画、和歌や俳句の中などにも見ることができるが、特質の1つであろう。

さらに、「習（ならい）」にあたっての心構えである、作法にのっとり、私心を捨て、素直に、正しく繰り返すことは、自我を厳しく抑制することにより、先人や師の教え、型が、鏡にものが映るように素直に自分の中にはいることになるのである。さらにそれを通して、形を学ぶことが心を学ぶ、体得するという伝承形態に、農耕文化に基礎した神道（自然の道）の項で述べた通りの神道の伝承法を見ることができ、ラフカディオ・ハーンは「神道の倫理は、すべて慣習に従う⁷⁾」こととも述べている。また、「無心」の境地について、沢庵は「不動智神妙録」の中で、千手観音の具体例をあげて述べているところがあるので、それを引用することにより、前述の心構えや、「無心」の境地について触れ、合わせて私の言う「神道」の意を敷衍したい。

「千手観音とて手が千御入り候はば、弓を取る手に心が止らば、九百九十九の手は皆用に立ち申す間敷。一所に心を止めぬにより、手が皆用に立つなり。観音とて身一つに千の手が何し可有候。不動智が開け候へば、身に手が千有りとても、皆用に立つと云う事を、人に示さんが為に、作りたる容にて候。仮令一本の木に向ふて、其内の赤き葉一つを見て居れば、残りの葉は見えぬなり。葉ひとつに目をかけずして、一本の木に何心もなく打ち向ひ候へば、数多の葉残らず目に見え候。葉一つに心をとられ候はば、残りの葉は見えず。一つに心を止めねば百千の葉

みな見え候。これを得心したる人は、即ち千手千眼の観音にて候。…諸道とも斯様ものにて候。神道は別して其道と見及び候¹⁾」

と述べ、さらに修業を積んで最高の境地に至れば、初心に還ると述べている。これが、普遍的なもの、人間の本心、すなわち神道の「真心」といえるであろう。

以上まとめてみると、日本の武道が文化として成立の中に見られる技術の精髓を集約体系化された型、それにしたがって訓練を受ける教習体系、その際の心構え、主観的な要素の以心伝心的な伝授法、運動の簡潔性や究極の境地の中に、日本古来の農耕文化に基礎した神道（自然の道）の伝承法や「心」を見ることができ。

まとめ

わが国の武道は、本来他の芸道と同様、道の極意は言葉では説明できないから、実践的修行によって以心伝的に体得するものである。その武道が文化としての成立の中で、当初武芸伝書は、自然現象や仏教語（特に禪語）をつけた技法の名称のみを羅列し、意味内容は口伝とされていた。その後、儒教、仏教、道教等の文言を借りて表現されるようになった訳ではあるが、伝承形態や心構えの中に、型を通して求める日本武道の心である、神道（自然の道）を認めることができる。

引用文献

- 1) 池田 論：沢庵不動智神妙録。徳間書店、東京、1983、pp. 34-35.
- 2) 今村嘉雄：日本武道全集・1 剣術（一）。人物往来社、東京、1966、p. 16.
- 3) 高山岩男：日本民族の心。玉川大学出版部、東京、1972、pp. 15-16.
- 4) 中林信二：武道論考。中林信二先生遺作集刊行会、茨城、1988、pp. 87-88.
- 5) 西山松之助：近世芸道論。岩波書店、東京、1988、p. 586.
- 6) 奥田克己：科学の限界と日本の数学。時事通信社、東京、1973、p. 119、pp. 132-33、p. 72.
- 7) ラフカディオ・ハーン：神国日本。平凡社、東京、1976、p. 85.